

第1回 精華町地域福祉計画策定委員会 議事録

日 時 令和5年8月14日(月) 午後1時30分～午後3時30分

場 所 精華町役場 5階 501・502会議室

【出席者】

(50音順、敬称略)

| | |
|--------|--|
| 有城 義浩 | 精華町教育委員会 総括指導主事 |
| 喜多 俊夫 | 精華町消防団 団長 |
| 齊藤 裕三 | 社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会 高齢者総合福祉施設神の園 施設長 |
| 鈴木 圭吾 | 精華町老人クラブ連合会 会長 |
| 田中 智美 | 精華町ボランティアセンター運営委員会 委員長 |
| 永井 元 | 社会福祉法人相楽福祉会 相楽デイセンター 施設長 |
| 野村 裕美 | 同志社大学社会学部 教授 |
| 早瀬 一男 | 社会福祉法人盛和福祉会 山城こども家庭センターだいわ センター長 |
| 林 徹 | 精華町自治会連合会 会長 |
| 古海 りえ子 | 特定非営利活動法人 みんなの元気塾 副理事長 |
| 山本 正來 | 社会福祉法人精華町社会福祉協議会 会長 |
| 吉川 尚美 | 一般公募 |
| 渡辺 一城 | 天理大学人間学部 教授 |

【欠席者】

| | |
|--------|---------------------------|
| 大上 たえこ | 精華町身体障害者協議会 会長 |
| 奥 和美 | 一般社団法人相楽医師会 精華班 |
| 齋藤 恵彦 | せいか地域福祉ドットコム 会長 |
| 檀上 幸裕 | 精華町民生児童委員協議会 会長 |
| 松本 雅和 | けいはんな学研都市精華地区まちづくり協議会 副会長 |

■内容

1. 開会

2. 町長あいさつ

3. 策定委員会の設置

(1) 委員の委嘱・紹介

本策定委員会については、精華町地域福祉計画策定委員会設置要綱に基づく会議体であり、町長の諮問に応じて、精華町地域福祉計画の策定に関する

事項について協議を行い、町長に答申をいただくこととする。

(2) 委員長及び副委員長の選出

要綱第5条第1項の規定により、委員長及び副委員長は、学識経験者の委員の中から定めることとなっており、委員長に野村委員を、副委員長に渡辺委員を提案し、一同了承。

4. 議事

事務局より議事(1)～(2)について説明

(3) 意見交換

<野村委員長>

「地域防災計画」「高齢者保健福祉」等関係のある計画と連動し、また、それらの計画に漏れがあるなら、それらを計画に盛り込む必要がある。

「ケア」というものがどの地域でも大きな課題になってくる。まずは、精華町の北部地域と南部地域の家族の状態の違いを踏まえながら考えていく必要がある。

南部地域は、夫婦間のトラブルが増えているが、南部の人が北部に引っ越したらそれは減るのか？そういう問題ではなく、北部は単身化している核家族世帯やひとり家族が多くなってきているということで、「夫婦」というよりも「孤立」の問題が深刻化しているのではないかと、という仮設が立てられるのではないかと、といった話など皆様の感覚というものをお聞かせいただきたい。

<有城委員>

学校現場で子どもたちの家庭の背景をたくさん見てきたが、このアンケート結果から新たな発見があり、参考になった。

<喜多委員>

毎年、精華町では小学校で防災訓練を実施しているが、今年度は消防団に出動要請がなかった。消防団は、これまで様々な訓練を実施しており、防災に関するノウハウを積み上げてきているのに、今回、出動要請がないのは残念に感じている。そのため、今回の防災訓練では、消防団として、別で訓練を実施することを考えている。

<齊藤委員>

私が大きな課題だと感じているのは、地域における様々な活動の担い手の

育成・確保である。現在、活動されている方の年齢が高くなってきているので、学生や40代から50代の方にとって、活躍できるような機会が作ればと思う。

また、当施設（特別養護老人ホーム）において、昔は入居者の家族がキーパーソンとして、入居者に何かあった際は対応してもらっていたが、最近では、親子の関係が希薄になってきており、家族が居ても協力してもらえないケースが増えている。今後、権利擁護の仕組みを整えていかないと、身寄りのない高齢者の支援が難しくなるであろうと感じている。

<鈴木委員>

「資料1-④」のアンケート調査結果報告書の38ページにおいて、精華町が優先して充実すべき施策の中で、「高齢者や障害者が在宅で暮らせるサービスの充実」の回答が一番多い。その中で、年代別において、10代から20代の回答者の割合が非常に高い。これはどういう意味かが疑問に感じた。

<野村委員長>

鈴木委員からご指摘のあった点については、どういうことを表しているのかをしっかりと理解した方がよいと思う。事務局からの説明の中で、精神障害者保健福祉手帳の取得率が上がっているとのことであったが、これは良いことだと思う反面、どの世代に増えているのかということを考え、どういう生きづらさを抱えている人たちが増えているのか、数字だけではわからないところを考えていきたい。

<田中委員>

自分自身がボランティア活動を始めた平成4年には精華町では、約1,200人のボランティアがいた。しかし、現在400人前後となっており、ボランティアの育成をどのように行っていくかが課題と感じている。

ボランティアに対する意識がどのように変容してきているかを一度、行政で調査してほしい。

ボランティアなくして精華町の地域福祉は成り立たないという大きな意識を持っていただき、地域福祉計画の中に盛り込んでいただきたい。

精華町では、ヤングケアラーなどの数字が全く出ていない。実態を知り、支援に取り組むことが地域福祉だと思うので、その点もしっかりと取り組んでいきたいと思っている。

<永井委員>

これまで長年、知的障害者のケアに携わってきたが、現場の人材不足が顕著であり、募集しても人がなかなか来ないことから、福祉職場における人材の育成・確保も重要な課題だと感じている。

障害の当事者が40代から50代、その親が70代から80代で同居している家庭において、親に何かあった際にはどうすればいいのかということが大きな課題であると感じる。このような課題は、障害分野だけではなく高齢分野や児童分野でもあるかと思うので、この場で共有できればと思う。

<早樫委員>

京都大和の家では、精華町から心の相談室という年齢を問わない相談事業を受託しているが、子どもの相談として来られる相談者の中に、背景に夫婦間のトラブルがあるケースが多いと感じている。

大人の方の相談では、自殺関係の相談もあることから、自殺対策に関する取り組みをどのように進めていくかが今後の課題と感じている。

ダブルケアラー（子育てと高齢者の介護をせざるを得ない状況の人）に対しても、支援策を検討していく必要があると思う。

<林委員>

自治会について、光台地区では半数以上の世帯が未加入である。そのような状況では地域の管理ができないことから、自治会未加入であっても自分の住んでいる地域を管理していけるような新たな仕組みが必要と感じている。

<古海委員>

精華町では、住民が高齢化し、町に活気がなくなってきたように感じる。自分の住んでいる町や地域に関心を持っている人が、精華町ではどれほど存在するのだろうか。実際には、職場と自宅の行き来だけで、ただその地域に住んでいるだけという人も多く、若いうちから自分の地域のことをもっと考えておかないと、退職した後、誰ともつながりがない状態になってしまう。

最後まで、住み慣れた地域で安心して暮らしたいと思える地域を作っていくためには、どうすればいいのかを考えていきたい。

<山本委員>

私が住んでいる地域は旧村地区で高齢者が多く、空き家が増えている。

車の無い高齢者にとっては、移動手段が大きな課題であり、足が不自由で

あれば、ごみを出すのも大変である。

これまで地区の住民が亡くなられた際、地域ぐるみで葬儀を行う習慣があったが、新型コロナウイルス感染症がまん延してからは、家族葬が増えたため、誰が亡くなられたかが分からない状況となっている。

<吉川委員>

私の子どもは生まれた時から難病を持っており、軽度の知的障害がある。

中学までは地域の学校の支援学級で、高等部から支援学校に移った。子どもが保育所から中学校に通っている間、福祉に関する情報は全く入って来なかった。

これまで自分自身が精神的に落ち込んだ時期もあったが、そのようなときに相談窓口等の情報を自分から探しに行く気力はない。「あそこに行けば何か情報をもらえるかもしれない」「少ししんどくなった時に、気晴らしに行こう」と言うように気軽に普段から足を運べる場があればいいと思う。そういう場所があれば、障害・高齢だけでなく、多様な問題を抱えた人が行きやすいのではないかと。行政窓口に行く前に、行政窓口につないでくれるような場所が必要なのではないかと。様々な福祉制度があるが、その制度にたどり着けていない人がたくさんいるということを、もっとピックアップしていく必要があると思う。

<渡辺副委員長>

「資料 1-①」にある「重層的支援体制整備事業の支援フロー図」についても、これでいいのかという話も含めて体制づくりを改めて検討していく必要があると思う。

<事務局>

次回の策定委員会は、10月10日（火）を予定しており、改めて連絡させていただきます。

5. 閉会